

序論)

今日からコリント人への手紙を読んでいこうと思います。コリント人への手紙は、聖書の中でもっとも手紙らしい手紙とされています。なぜ、そのように言われているかというと、この手紙は、最初に差出人と受取人の名前があって、次に挨拶があって、その次に感謝や祈り、そして、本文があって、結びの言葉がある。という当時の手紙の典型的な形を守っており、その内容もローマ人の手紙のように神学論文のような形ではなく、具体的な問題に対する回答となっており、更には差出人であるパウロの感情もわかりやすく表現されているからです。

そういう意味では、今まで読んできた旧約聖書のイザヤ書よりは読みやすいと思います。

そうはいっても、この手紙が書かれた背景が分かったほうが、内容が理解しやすいと思いますので、最初にこの手紙の宛先であるコリントの街と、そこにある教会の状況について少しお話をしたいと思います。

コリントとコリントの教会)

コリントというのはこの地図（ローマからイスラエル沿岸の地図）でいうところのここに 있습니다。もう少し拡大するとこうなります（拡大図）。見てわかるようにコリントはイタリア側からもトルコ側からも船で行くことができるため非常に栄えた街でした。ただし、色々なところから来れるということは、色々な文化が混ざるところでもあり、霊的にも混沌としていました。具体的にはこの街には、エペソのアルテミス神殿があったり、ギリシャの典型的な神々が祀られている神殿があったり、更にはエジプトのイシス、セラピスなどが祀られていたり、シリアの豊穡の女神アスタロテが祀られていたりして多くの偶像の影響が強い街でもありました。

更にはこの街は性的にも乱れていて「コリント人のようだ」というと「不品行を行う人」と理解されるほどでした。

だから、このコリントにある教会も非常に多くの問題を抱えていました。派閥争いがあったり、道徳的な乱れがあったり、間違った結婚観を持っていたり、偶像に供えた肉をどのように扱うべきかという問題があったり、礼拝の仕方も乱れていたり、キリストの復活を信じきれていなかったり、実に多くの問題を抱えていたのです。それでいてこの教会はただの問題教会かというところではなく、教会員の中には預言の賜物や異言の賜物、癒やしや奇跡といった人々の目を引く、いわゆる力の

賜物といわれる物を持っている人たちがおり、ある意味で活発な教会だったので
す。

そんな力はあるけど、問題も多く抱えている教会に対して、この教会を混乱状態
から立て直すために愛をもってパウロが書いたのが、このコリント人への手紙で
す。

ですから、私たちはこの手紙を通して、教会が陥りやすい問題に対してどのよう
に解決していったらいいかを教えられると思います。

それでは、さっそく今日の箇所を目を向けていきましょう。今日の箇所はこの手
紙の最初の挨拶的な箇所ですが、この箇所からも私たちは多くのことを教えられま
す。

1) 神の教会は公同の教会である

最初に教えられるのは、「神の教会は公同の教会である」ということです。1 節か
ら 3 節を読みます。

1:1 神のみこころによりキリスト・イエスの使徒として召されたパウロと、兄弟ソ
ステネから、

1:2 コリントにある神の教会へ。すなわち、いたるところで私たちの主イエス・キ
リストの名を呼び求めているすべての人とともに、キリスト・イエスにあって聖な
者とされ、聖徒として召された方々へ。主はそのすべての人の主であり、私たち
の主です。

1:3 私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにあり
ますように。

この箇所はまさに当時の手紙の典型的な言い回し、最初に差出人と受け取り人の
名前があって、祝福と祈りのことばが添えられている。という当時の手紙の挨拶の
形に沿った書かれ方をしていますが、注目していただきたいのは 2 節

1:2 コリントにある神の教会へ。すなわち、いたるところで私たちの主イエス・キ
リストの名を呼び求めているすべての人とともに、キリスト・イエスにあって聖な
者とされ、聖徒として召された方々へ。主はそのすべての人の主であり、私たち
の主です。

というところですよ。

ここでパウロはコリント教会という神の教会は、他のすべてのキリストの名によって集められている教会と同じように、キリストによって聖なる者とされ、神様によって召された、同じ主を仰ぐ公同の教会なのだ。 ということを強調しています。

公同の教会というのは、富川福音教会とか、日高キリスト教会とって地域の教会に限定されず、**すべてのキリスト者によって成り立つ神の民の群れ全体**のことを指します。パウロはコリントの教会の人たちに、コリント教会という小さな教会の民ではなく、すべてのキリスト者によって成り立つ公同の教会の一員であることを意識させたかったようです。

みなさんは、公同の教会というものを意識したことがあるでしょうか。橋本さんや忠善くんといった地域教会の枠を超えたゴスペルクワイアに参加されている方や、宣教区や教団の行事に参加された方は、自分たちは一地方の教会の一人なんじゃなくて、もっと大きな教会の一員なのだとすることを意識されたことがあるかもしれません。でも、普段、そういった自分たちの教会以外の信徒の方々と交わる機会がない方々は、公同の教会といってもピンとこないかもしれません。

でも、私たちは日高キリスト教会、富川福音教会という地域の教会の一員であるのと同時に、もっと大きな世界規模の教会の一員である。ということを意識する必要があります。なぜならば、自分が所属している地域教会のことだけで物事を考えてしまうとき、いつのまにか、分裂分派を起こしたり、いっぱい奉仕をしている人とか、能力的に優秀な人が高ぶってしまったり、その地域の常識に汚染されて霊的な妥協をしてしまったりすることがあるからです。

実際、コリントの教会がそうでした。細かい話は今後、この手紙を読み進めて行く中でお話しますが、彼らは自分たちの教会の中だけで派閥争いをしたり、教会の中で優秀な人たちが自分たちは特別だと思っていたり、コリントという性的に乱れている街の中であって、コリントの教会の人たちの中にも性的に乱れた人たちがいました。

私たちは、自分の所属協会だけを意識して歩む時、いつの間にか派閥を作ったり、高慢になったり、霊的妥協をしてしまうことがあるのです。

しかし、自分たちが公同の教会の一員であるということを意識するとどうなるでしょうか。世界規模の教会ですから、分裂より一致することや協力することの方が大切だと思うようになるし、自分だけが特別だという高慢からも守られます。さらには、どこかの教会のメンバーであるということ以前に、自分はキリストに属する

者だという本質を意識するようになり、地域教会という枠にとらわれない安定した信仰を持つようになり、地域の枠を超えた宣教協力に前向きになれる。

みなさんは、公同の教会、同じ主によって救われた世界教会の一員であるということ意識されているでしょうか。

2) あなたがたは豊かな者とされている

次にパウロが、今日の箇所で強調していることは、主によって救われたあなたがたは、豊かにされている者である。ということです。4 節、5 節を読みましょう。

1:4 私は、キリスト・イエスにあってあなたがたに与えられた神の恵みのゆえに、あなたがたのことをいつも私の神に感謝しています。

1:5 あなたがたはすべての点で、あらゆることばとあらゆる知識において、キリストにあって豊かな者とされました。

パウロはコリント教会が問題教会であることをよく知っていました。でも、彼はこの教会のことを覚える時、「いつも」神様に感謝しているそうです。

なぜでしょうか？ それは彼らが様々な問題を抱えているけども、キリストにあって豊かな者にされていたからです。彼らは、「あらゆることばとあらゆる知識において」豊かな者にされていました。「あらゆることばとあらゆる知識」というのは、パウロたちから教えられてきた宣教のことばと、キリストによる真理の知識のことです。

私たち、富川福音教会及び日高キリスト教会も様々な人に宣教のことばや真理の知識を教えてもらってきました。牧師が 2 つの教会を兼牧することによって、私以外にも、東頭先生や高橋先生、のりこ先生や KKG の杉本先生のメッセージを聞く機会が与えられ、今年は鵜田先生や藤山先生にもみことばの奉仕をして頂く予定となっています。それだけでなく、2 つの教会とも何人もの先生方によって育てられてきた教会です。しかし、語っている人は違ったとしても、主による宣教のことばと真理を教えられてきたことは違いがなく、そういった意味では私たちも主によって豊かにされた教会だといってもよいと思います。

そして、その結果どうなったかというと、(7 節表示) コリントの教会はあらゆる賜物を持つようになり、キリストの教会を待ち望むようになりました。

それは私たちも同様でしょう。私は、牧師として、みなさんの賜物を上手に活かしていきれていないと思っていますが、でも、みなさんには様々な賜物を与えられてい

と思っています。賛美の賜物や祈りの賜物、とりなしの賜物や奉仕の賜物、教師の賜物やもてなしの賜物など、色々な賜物がみなさんに与えられていて、私たちは豊かにされているのです。

私たちは決して大きな教会ではありません。でも、私たちには主のことばと真理の知識が与えられていて、結果として多くの賜物が与えられており、豊かな者にされているのです。

問題は、その与えられている豊かなものを十分に活かしきれているかどうかです。しかし、まずは、私たちはパウロのように主によってみことばと真理の知識が与えられ、豊かにされていることを感謝すべきではないでしょうか。

私たちは、様々な問題を抱えていたとしても、主にあって豊かな者にされているのです。私たちはそのことを感謝して、主の再臨を待ち望んでいきたいと思えます。

3) 主は、あなたがたを堅く保ってください

そして、今日の箇所で教えられる 3 つ目は、私たちは、主によって堅く保ってください。ということです。8 節、9 節を読みましょう。

1:8 主はあなたがたを最後まで堅く保って、私たちの主イエス・キリストの日に責められるところがない者としてくださいます。

1:9 神は真実です。その神に召されて、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられたのです。

8 節から順番にみていきますね。(8 節表示)

「主はあなたがたを最後まで堅く保って」というのは、【主】が教会の中に現在進行形で働き続けてくださっていることを意味しています。私たちを救い、召してくださった神様は、今もなお私たちを神の民として堅く保ってくださいなのです。

みなさん、これは神様が現在進行形で私たちの中に働いてくださっているということです。【主】は、イエス・キリストが再臨される最後の時まで、みなさんを神の民として守り続けてくださるお方なのです。しかも、ただ神の民としての立場を守るだけじゃなくって、「主イエス・キリストの日に責められるところがない者としてくださいます」。つまり、私たちは不完全な者ですが、【主】はそんな不完全な私たちを、【主】に責められることがないように聖くし続けてくださるのです。

だから、たとえ今、私たちの中に問題があっても大丈夫なのです。

コリントの教会に様々な問題があったように、日高キリスト教会、富川福音教会、それぞれの教会にそれぞれなりの問題があるでしょう。それは牧師である私の問題かもしれないし、信徒の皆さんの中にある問題かもしれません。でも、例えどんな問題があったとしても、【主】はそんな問題を抱える私たちの中に働き続けてくださって、神の民としての立場を守り、さらには問題を抱える私たちを少しずつ聖くして、成長させてくださり、やがて責められることがない者に変えてくださるのです。

だから、私たちは例え、教会の中に、信徒の中に躓きとなるようなことがあっても絶望する必要はありません。【主】は生きて働いて、私や皆さんや、みなさんが気になっている人を聖めてくださるからです。

そして、そのために神様がしてくださったのが、(9 節表示) 私たちを【主】イエス・キリストとの交わりに入れてくださるということです。

みなさん、キリストとの交わりは、私たちを聖めてくださいます。

ここでこの怖い顔をした牧師を紹介したいと思います。彼の名前はジョン・クインシー・アダムス牧師です。ニューヨークで牧師をしていたジョン・クインシー・アダムスさんは、6 歳で信仰体験をし、10 歳で真摯な祈りを通して【主】にある平安と喜びを経験したそうです。彼は 20 歳で洗礼を受けました。しかし、クリスチャンになった後も、彼は「罪からの解放」を祈り求めながらも、自分が罪の力から完全に自由になれない葛藤をしていたそうです。

そんな中、彼は 21 歳で伝道者として召され、1856 年にニューヨークの北部バプテスト教会の牧師になりました。そして、牧師になった後に「聖さ」をテーマにした集会に参加して、「キリストによる完全な救い」ということを教えられ、神様にすべてを献げる誓約をしたそうです。

ところが、【主】にすべてを献げる誓約をしたはずなのに、まだ罪の支配から解放されたという実感がなく、やがて彼は病気になり、それをきっかけに信仰から一時的に離れてしまったそうです。でも、悔い改めて信仰を回復し、そこから、ただの罪の赦しだけではなく、罪からの完全な解放を求めて、【主】に祈るようになったそうです。そして、一年近く祈りを通して【主】と交わる中で、1859 年 3 月 24 日「アブラハムは神を信じた...それが彼の義とみなされた」という箇所が示され、翌日の 25 日、書斎で【主】に祈っているときに、「神を信じた」という箇所が心に強く迫ってきて、一つの決心をしたそうです。その時の彼のことがこうです。

「私は全てを神に捧げた。それは全てが神のために聖められるためである。私は自分自身を神に捧げた。それは全ての罪から清められるためである。私は求め、信じ

よう。」彼は6歳で信仰体験をして、10歳で祈りを通して平安と喜びが与えられ、21歳でニューヨークの牧師になった人です。でもその人は、1年間の【主】との深い交わりを通して、改めて信じることの奥義、信じることによって罪が清められるという確信を持つようになったのです。

私の献身の証しは何度もしていますので、改めて言いませんけども。みなさん、私たちが【主】と深く交わるとき、私たちは聖められ、一步一步成長していくことができます。それは牧師であっても、信仰歴の長い方であっても同じです。

なぜならば、【主】は今も私たちの中で働いて、私たちを神の子として守り、聖め、成長させてくださっているからです。私たちはこの【主】と交わることによって、キリストの日に責められることのない者にしていただけるのです。

だからみなさん、キリストと交わることを大切にしましょう。具体的には充実したデボーションを日々持つようにしてください。それこそが、私たちの成長の原動力なのです。

結論)

今日はコリント人への手紙の最初の箇所から、私たちキリスト者と教会にとって大切な3つの事を学びました。

第一に、私たちは地域教会に属すると同時に、全世界に広がる「神の公同の教会」の一員であるということです。この大きな視点を持つとき、私たちは内向きになることなく、分裂や高慢から守られ、より広い視野で一致と協力を重んじることが出来ます。

第二に、私たちはキリストにあって「豊かな者とされている」ということです。問題や弱さを抱えていたとしても、主は私たちにみことばと真理の知識を与え、その上で一人ひとりに賜物を与えて豊かにして下さっています。この計り知れない恵みにまず感謝し、与えられた豊かさを喜び、主の再臨を待ち望む者でありたいと思います。

そして第三に、最も私たちを力づける約束は、「主が私たちを最後まで堅く保ってください」ということです。私たちを召して下さった真実な神様は、今も私たち一人ひとり、そして教会の中に生きて働かれ、私たちを聖め、成長させ、キリストが再び来られる栄光の日に、責められるところのない者として完成させてくださいます。

そのための鍵は、日々、主イエス・キリストとの生きた交わりを持ち続けることです。

皆さん、私たちの教会にも、また私たち自身の内にも、様々な課題や弱さがあるかもしれません。しかし、決して失望することはありません。私たちは、公同の教会という大きな教会に連なり、主によって豊かにされ、そして何よりも、真実な主ご自身が、私たちを最後まで力強く守り導いてくださいます。

この確かな希望と約束に信頼し、日々主との交わりを深めながら、互いに励まし合い、与えられた恵みを分かち合い、キリストにある希望を持って共に歩んでまいりましょう。

★応答の時

それでは今、静かに主の前に心を開きましょう。

今日、神様が与えてくださったみことばを通して、あなたはどのように応答しますか？

- ・私は、公同の教会の一員であることを意識して歩みます。
- ・私は、主に与えられている豊かさに感謝して、賜物を用いていきます。
- ・私は、主との交わりをより大切にして、日々成長していきます。

このような思いが与えられた方は、週報の「私の応答」欄に、自分の言葉で静かに記してみましょう。

今しばらく、神様に心に向けながら、今、自分の応答を主にお捧げしましょう。